政は正なり ⑭

公明党全国代表者会議議長 太田昭宏

リスクを負う覚悟の政治を！

〝八方美人〟をやめ、スピードある対応を

おおた・あきひろ
昭和20年10月6日、愛知県生まれ。京都大学大学院修士課程修了。公明新聞記者を経て、衆議院議員当選5回。公明党代表を経て公明党議長

「八方美人の政治は八方ふさがりになる」――小泉元首相は最近、野田新政権についてそう語ったという。

私は「八方美人の政治ではなく、リスクを負う政治が大事だ」とずっと言ってきた。円高・株安・デフレ、財政難、外交・安保、原発事故とエネルギー問題、高齢化の加速と社会保障、環境制約、そして東日本大震災の復旧・復興、さらには風水害に直撃される脆弱国土――相当、腹を決めた「リスクを負ってもやり抜く政治」を貫かないと、この国はもたない。直面しているのはキレイごとは許されない大変な危機だ。しかし、野田政権は最初から「ダンマリ」「泥の下にもぐる」「本格論戦を逃げる」という「沈黙の政治」を続け、しかも最も目配りをしているのは党内融和という「内向き政治」だ。

国民の望んでいるのは「希望」や「突破口」だ。「野田首相の所信表明に驚いた。見事に何も述べていない」「ただ一つ明快なのは増税すること」（田原総一朗氏）という指摘は同感である。「リスクを負わない」「意思決定しない」ということは、じつは無責任ということだ。

とにかく「批判されるのが怖い」「いつも逃げ道を用意する」「トップが意思決定を回避し、会議や協議に委ねる」――最もリーダーシップが求められた3・11から半年余、こうした「遅い、にぶい、心がない」民主党政治が続けられたが、たとえば南相馬市などの「屋内退避だとか自主避難」、さらには浜岡原発の停止も「お願い」であって、「決めたのは中部電力」と逃げを打つ。ひどい話だ。

「八方美人で逃げを打つ政治」は、人々を落胆させてやる気をそぎ、一方では思考停止とイデオロギー優先を促すことになる。寺田寅彦の「ものを怖がらな過ぎたり、怖がり過ぎたりすることはやさしいが、正当に怖がることは、なかなかむつかしい」という言葉をひいて、武田徹氏は、原発推進派も反対派の運動家も「科学的な思考を手放すリリースポイントが早すぎる」と厳しく指摘する。

大学時代、耐震工学を専攻した私も、地震・津波についての国会論戦を聞いて、「論議自体がおよそ非科学的・恣意的で、それ自体が風評被害となっている」と感じたことが多々あった。

野球やゴルフでも体が早く開いて、リリースポイントが早すぎるということはよくあることだが、思考の粘着力を欠いては、これら政治・社会の高度の難問には答えられない。

世界は動いている。経済も常に動いている。東日本大震災のみならず、地球自体が、大きな気候変動のなかにある。正視眼の動体視力が求められている。

たとえば、9月に入っての豪雨はケタ違いのものだ。台風12号と15号のもたらした被害は甚大であるだけでなく、「総雨量2000㎜時代に突入」という新たな段階になった。「正当に怖がる」ことが重要だ。

日本気象学会は9月7日、「総雨量2000㎜時代を迎えて」との見解を発表したが、こんな数字は今まで〝想定外〟であったものだ。最近のゲリラ豪雨（短時間で局地的）と集中豪雨（梅雨末期や前線の影響で100㎞規模の範囲で起きる）は、明らかに異常事態だが、問題はそれが常態化しているということだ。

今度の台風12号では、総雨量が1000㎜を超えるところが何カ所もあり、最大は2000㎜を超えたところがある。従来では考えられないことだ。しかし、最近は毎年のように1000㎜を超えるところが出ている。

また、山の斜面が表土層を流す表層崩壊とは違い、岩盤の深い部分がザックリと削られる深層崩壊が急増している。全て異常な降雨量に起因する。新しい事態だ。

野田政権は12号の時も、15号の時も、動きが緩慢で結束しての対応がない。山間部では避難命令が出ても、逃げ場所自体がないではないか。集落ごとに1か所でも安全な場所を急ぎつくれといいたい。

ここで沈黙の、人の顔色をうかがう八方美人政治では困る。都市部も100㎜／hを超える豪雨が頻発しており、現在の基準である50㎜／h基準を見直す必要がある。私は75㎜／hに対応できるように、貯留管の拡充や施設の貯水池等の連結・有効利用などのハードで、それを上回る部分はソフトで対応を、と考える。復旧・復興も、円高も、デフレも財政難も災害対策も、「八方美人の政治は八方ふさがりになる」。スピードと覚悟の政治が要請されている。

（次回は11月5日号掲載）

アビリタ 小澤良介の〝カク〟わしき呟き ⑮

ネットとリアルのバランス感覚

ついに僕らの「夢の箱」が完成した。

オープニングパーティーには何と各界から200名を超える方々にご来場いただき、正直ご近所の早稲田の人たちは驚きながらも、新参者の僕らの移転を喜んでくれた。

ご来場いただいた方々の属性は、経営者、芸能人やモデル、政治家、外国人と多種多様。

インテリア関係者はほんの僅か1割満たない程度と家具屋のオープニングとは思えない独特な空気感を漂わせていた。

早稲田の一本裏手、ひっそりとした路地に、ロールスロイスやフェラーリ、ポルシェやマセラティと驚く程の高級車が次から次へと止まる。こんな光景、誰が想像できただろう。

またこの早稲田の地に今まで無かった新しい風が！と既に近所では噂になっており飲食店を新規開拓しご挨拶するたびに、すでに僕たちの事が周知されていた。

狙い通り。やはりとても嬉しく、「口コミ」を発生させる上でも良い傾向だ。

まさかこれほどの箱が完成するとは、この物件をはじめて見た時には想像できなかった。

ただ、自分が今までに無かった程ワクワクし、社員に興奮して電話した事は明確に覚えている。

いまだに「新築ですか？」と聞かれる事も多く、古いものを新しくする事の楽しさを改めて知った。一人の男の単純な「ワクワク」という感情から生まれた形。皆の協力があってこそ生まれた形でもあり、本当に人生において素晴らしい経験が出来たと感謝の気持ちがいまだたえない。

さて、オープン後の傾向だが、平日にはそこそこの来客があり、週末には僕たちが今まで経験した事のない多くの来客がある。早稲田の静かな路地に佇むこの新箱への来客は、9割以上がネットを見たお客様で構成されている。一流の路面に高額な家賃を払って出店するより、静かな路地の適正な家賃の場所を選択し、出来るだけ家具を見ることのできる環境を構築、それを見たい人だけに見せる。購買意欲が高く、意識の高いお客様のみを相手にするという事だ。結果、意識の高い人が満足して帰れば、当然口コミも生まれる。その路地が寂しく静かだったのなら、僕らで賑やかにすればいいじゃないか！その方向性で攻めた。結果、正直スタッフは対応に追われる程の嬉しい悲鳴で、週末増員も検討している。

ネットとリアルがうまくマッチングするといい結果が生まれる。今や、ネットとリアルのバランス感覚が必須だ。リアルもネットも、強化すればする程、頭打ちという試練が発生し、そこから逸脱するには、相互の連携が必須になる。ただし、リアルとの関係においては、あくまで「連携」であり、必ずしも出店、拡大とは限らない。そこは時代を考慮したポイントになるであろう。今回は、リグナショールームのみならず、アビリタの本社移転も兼ねていた為、そこその規模となったが、時代の流れを考えると、先行投資でリアルに力を注ぎすぎることは最適とは言えない。そこにお金をかける前に、もっとやるべき事がある、やれる事がある。今こそ経営者の大変革が必要とされる時代。頭の固い、古い体質の経営者は5年後、10年後、企業に辛い結果を導くだろう。

なお、余談にはなるが、10月5日、6日と大川にて開催される OOKA WA The Future Furniture 2011において、当社がデザイナー関光卓氏と共に開発した新ブランド「AZO」を発表する。卸販売も展開する。

リグナのネットにおける膨大な顧客ニーズデータから分析し、いま最も旬で、売れるであろう家具を開発したつもりだ。ぜひ大川にお越しになり、ご覧頂きたい。

http://www.rigna.com/topics/azo

（次回は11月5日号掲載）

おざわ・りょうすけ　愛知県出身。明治大学在学中に起業し、卒業年の2003年に現在のアビリタ株式会社を設立。家具のネット販売「リグナ」「ガラン」、製造、デザインなどを幅広く手がける。2010年には月9ドラマ『月の恋人』の監修を務めた

禽獣の文化

作者 白鳥保夫

第四章 戦前戦後の業界終わる ㉒

主だった債権者を集め、田崎商店が神山のバックに付くと宣言した。条件は債権の7割カット、残り3割を2年後から5年払いとする。工場は半分に縮小し、整理タンス、食器戸棚の生産に絞り込む。製品は田崎商店が責任を持って買い上げる。こうした内容で大方の賛同を得た。業界における田崎商店の信用は絶大だった。なにより大御所の吉蔵自身が面に立った整理では、債権者に否応あるはずは無かった。なにより一時は破産も覚悟した神山だ。下手をすれば一割配当もどうかという債権者にとり、この上ない話であり、悪い条件ではなかった。

以来20年余、サニーの下請け時代のように外車を乗り回すこともなく、まして松本、甲府の花街に顔を出すことも無く、地道にタンス、食器棚の生産に励んできた。難しい時代を迎えて決して楽な経営ではなかったが、月産3千万円強をあげて、今日明日の心配をしなくてもいい経営をしてきている。

〈その吉蔵さんが亡くなった〉のだ。とるものもとりあえず上京してきた神山には、東京が史上最高の厳寒にあることもまるっきり感じることのない悲嘆の極みにあった。

大阪家具の西田、広島のマルビシ木工の坂上専務、伊関家具の輪島常務と連れ立って焼香し、清めの席に招かれた吉岡は、関係者の間をぬって、礼深く挨拶している小暮市郎を目に留めた。1月15日の母の本葬に先立ち、小暮はわざわざ吉岡の事務所まで足を運んでくれたうえ、関係する団体へ花輪、香典と気配りをしてくれた。その小暮に吉岡は丁重に礼を述べた。

浅草の通称「家具街」で、田崎家具センターと冨士家具センターは双璧をなし、ライバルとして激しい競争を繰り広げてきた。東京で、いや日本で「うちが初めて家具センターという名で大型販売ショールーム作った」と田崎が言えば、一方の冨士家具センターはいち早くテレビコマーシャルで「1階フジでございます。5階もフジでございます。8階もフジ家具センターでございます」という当時、話題のテレビ宣伝を繰り広げていた。

（次号に続く）